

## 21世紀のスキー指導者像

日本スポーツ文化研究所  
所長 福岡 孝純

スポーツはその本質としてむすびつけ命を与えるという性格を有しています。スキースポーツも例外ではありません。いつもの何の変哲もない生活空間が、スキーファッションにより一瞬にして、夢や希望に満ちた空間に生まれ変わります。その夢づくりの手ほどき、先達あるいは規範こそがスキー指導者に他なりません。

指導者でもプロは、どちらかというところ保守的であらかじめ決められた教義教程にもとづいてレッスンをを行います。しかしながら、アマチュアスキー指導者にとって大切なのは予め決められたプログラムを伝達するのではなく、自らも生徒と共にスキーの夢を追及する仲間ではなくてはなりません。従ってアマチュア指導者の質こそが純粋に商品化される以前のスキーの理想なのです。大自然に直面し、その自然の恵み、厳しさを理解しつつ、冬のパラダイスに遊ぶやりかたは全てアマチュア指導者の手にゆだねられているといえます。

1950年代から90年代までのスキーヤーの夢は、大自然に対決する技術の習得でした。1950年代にオーストリアのクルッケンハウザー教授らにより、競技の技術を参考につくられたバインシュピール技術は、その合理性からスリル、スピードを追及する技術優先のスキーに対してはぴったりでした。この技術は世界の主流を占めるに至り、オーストリアのホピヒラー教授に引き継がれ、世界のトレンドになりました。

私はちょうどその頃サンクリストフでスキーの技術の物理的解析(バイオメカニクス)に取り組み、将来のスキー技術はマテリアル(用具)が決め、そのすべりは限りなく画一的になり、ロボットやゲーム・マシンのようになると予測しました。そしてその時このような技術との決別を決意したのです。

スキー技術や理論が進めば進むほど、スキー文化は文明に近づき、それは知らず知らずのうちに、人間を疎外へと追い込んでゆきます。スキーの機械化には、技術が進歩しても、結果的には個々の人間が画一化、平準化してしまうというプロセスがあるのです。私たちがそのような状況にならないためには、技術主義(ハイテク・ハイタッチ)ではなく、自然(外面性・内

面性)にもどるということは何かということ、本質的に考えることが必要です。

スポーツの哲人であったヨゼフ・レックラー教授が「私たちはスキーをする前にまず人間であれ、そして大自然を共に生きる畏敬の念をもて」といわれた言葉が浮かんできます。

自然とは何もアウトドアを意味しません。自然は私たちの心の中にもあるのです。人間を知り、自然を知り、一体となるフィーリングを追及することで人間は大宇宙の神秘に触れ、活然の気を感じられるようになるのです。このときスキーは、かのフリチョフ・ナンセンがいったように、再びスポーツの王者として返り咲くことができるのでしよう。

様々な場面で人間性を取り戻すことが叫ばれているなかで、スキーにおいても技術的、機械的なものから、人間に真の喜びがもたらされるものへのパラダイムの変換が求められています。ネイチャー・ファッションを本質的な動機とし、人間があらゆる義務から解放され、全く自発的に一つのことを達成すること、つまり、自己蘇生、自己解放、自己実現、自己創造をなすこと、ここに私たちは再び人間と自然が一体となる共生の原理をみることが出来ます。

私たちに今必要なのは、安易な計算計量主義に基づく薄っぺらな偽物の理性ではなく、感性をも含めた絶対者の叡智ともいえる宇宙的理性であります。氷が溶けたら水になるというような紋切り型の論理ではなく、氷が溶けたら春になるということを私たちは知らねばなりません。

スキー指導者、それは技術の指導者ではなく、人間の指導者であるべきです。それは生命の歓喜を探る指導者でもあります。素朴な自然への感動をおろそかにせず、スキーを通して身体的にも精神的にも生きていることの喜びを仲介するという大きな使命があるのです。ワン・フォア・オールこそこの道へ至るキーワードでもあります。スキードリーム・メーカーとして、自発性を失うことなく、また全ての理論にまどわされることなく、生命が輝き出るようなスキーの素晴らしさを伝えてゆかねばなりません。